

輪島朝市組合関係者が22日視察

東三河版



来場者でにぎわう輪島朝市復興軽トラ市。2024年11月、新城市町並で

震災からの再起 新城軽トラ市に鍵

2024年1月の能登半島地震と大規模火災で壊滅的な被害を受けた石川県輪島市の輪島朝市の復活を目指し、同市朝市組合の関係者約20人が22日、新城市中心部で開かれる「しんしろ軽トラ市のんほいルロット」を視察する。
(小沢伸介)

復興の思い 来場者となぐ場に

観光庁の「能登半島地震からの復興に向けた観光再生支援事業」の一環。組合は、輪島市内の仮設拠点で新たな形の「復興朝市」を開催するとともに、全国各地の「出張朝市」でのPR活動と連動し、復興に思いを寄せる観光客の誘客を目指している。

軽トラ市は、軽トラックの荷台に商品を積んで1カ所に集まり、荷台の周囲にテーブルやテントを広げて販売する形で一時的に出現する商店街。愛知大三連南信地域連携研究センターは、この手法にまちの再建を待たず輪島朝市の早期復活の可能性があると、実証研究を進めている。

組合の視察は、しんしろ軽トラ市の運営方法を学ぶのが主な目的。このほか、同センターとススキが24年11月から隔月で出店してきた「輪島朝市復興軽トラ市 in 新城軽トラ市」で、能登の魚介類の干物や乾物、輪島塗の商品などの販売を手伝い、来場者と交流を深める。

事業では今後、岩手県雫石町の軽トラ市や、東日本大震災から2年余りで再開した宮城県名取市のゆりあげ港朝市などの視察も計画。8月30、31両日には輪島市で「復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島」を開催し、全国から約1000人が集まり、朝市の約40の露店と軽トラック約20台が出店を予定している。

同センター長の戸田敏行教授は「復興まで長くかかっても共感が続いていくには、昔ながらの対面でのつながりが重要。主役は輪島の人たちで、そこにどう寄り添えるかがテーマの挑戦的な取り組みだが、新しい朝市の形になっていくと思う」と話している。